

# 日本人大学生における異文化理解の現状

沼田 潤 (esi3302@mail2.doshisha.ac.jp)

〔同志社大学〕

Present state of Japanese university students' intercultural understanding

Jun Numata

Graduate School of Social Studies, Doshisha University, Japan

## Abstract

The purpose of the present research was to examine the present state of Japanese university students' intercultural understanding in order to obtain some implications for intercultural education in university. The results revealed the present state of Japanese university students' intercultural understanding was not monolithic. On the one hand, some attached importance to intercultural understanding, on the other hand, others slighted or resisted intercultural understanding. Moreover, it was clarified that there were differences on understanding toward social minorities and stereotypic understanding between female and male university students. Based on these results, future direction and tasks on intercultural education in university were investigated.

## Key words

intercultural understanding, university students, multicultural coexistence, intercultural education, Japanese education

## 1. 問題

現在の日本の初等教育や中等教育、また高等教育の現場において多文化共生の実現を目指す異文化理解教育の重要性がますます認められるようになってきている。その背景として、加速する国際化が挙げられるであろう。政治や経済だけでなく、文化の面で国際的な交流が進んでいて、それに伴って、多様な背景を持つ人々との交流が増加することが考えられる。このような状況の中で、様々な文化を理解し、多様な考え方を持つ人々との共生の在り方を模索していくことが今日的な課題となっており、この課題に取り組んでいく上で教育に期待が寄せられていると考えられる。

それでは、日本の教育政策において強調されている異文化理解教育の特徴はどのようなものであろうか。沼田(2009a)によると、環境・開発問題といった地球規模的問題の学習や、外国語や外国・日本の伝統文化の学習が重視されていること、“異文化イコール外国、自文化イコール日本”という枠組みが強調されていることが教育政策において強調される異文化理解教育の特徴として挙げられている。そして、日本の初等・中等教育における異文化理解教育の実践状況に関する調査結果によると、以上で示した特徴がその実践においても強調されていることが明らかにされている(沼田, 2009b)。したがって、日本における異文化理解教育には、文化を国家レベルで捉え、自文化としての日本文化と異文化としての外国文化をそれぞれ均一なものとして二項対立的に捉えるまなざしが存在していると言えよう。つまり、文化と文化との

間には明確な境界があるという考え方である文化本質主義が徹底されているのである(馬淵, 2002)。

文化を固定的に捉えることで、他者のステレオタイプの理解を助長することが考えられ、差別を正当化する偏見がもたらされることが考えられる(Allport, 1954)。したがって、ステレオタイプの理解を低減するため、人間の多様性の理解を深める教育実践が肝要である。さらに、国際社会でも活躍できる日本人の育成も重視されることから、どうしても日本社会の内における多文化共生の議論が活発に行われているとは言えない(沼田, 2009a; 2009b)。例えば、外国人の子どもは日本では教育を受ける権利が保障されていない。それゆえ、適切な教育を受けることができない外国人の子どもが日本社会には存在する(宮島, 1999)。このように多様な文化的背景を持つ人々は、それぞれ様々な社会的問題に直面していることが考えられ、一人ひとりが安心して生きることを目指す多文化共生に挑戦していくために、日本社会の内における多文化共生に関する問題の理解を深めさせる教育実践が重要である。

では、異文化理解教育の実践を反省的に捉え、改善していくためにも、異文化理解教育を受けている生徒や学生に対する効果を明らかにすることが肝要である。どのように異文化を理解し、多文化共生を認識しているか、また異文化と向き合おうとしているかを測る尺度には次のようなものがある。まず、山岸・井上・渡辺(1992)の異文化対処力テストが挙げられる。このテストは、異文化環境における個人の適応能力を捉えるテストとして作られたものである。具体的には、自分の行動や考え方が自文化に規定されていることへの気付きの程度や異なる文化に対する関心の強さを示す“カルチュラル・アウェアネス”、そして異質なものにどの程度自己を調整して対

処できるかの度合いを示す“自己調整能力”を測るものである。また、岩田（1989）は、“反‘自民族優越性’意識”、“異文化体験指向”、“地球運命共同体意識”、“国家不要意識”という4下位尺度から構成されるコスモポリタニズム尺度を作成しており、異文化理解・異文化適応に関連するものとして捉えられている。さらに、假屋園・城戸内・阪本・二宮・岩脇・窪田（2009）は、高校における国際理解の授業における評価規準尺度を作成している。異文化理解に関する授業を通して、異文化理解・多文化共生に対してどのような認識を持つようになったかを測るために作成され、“日本人としての意識”、“新しい環境への自信”、“外国への興味・親近感”、“身体言語への興味”、“習慣の違いへの興味”、“自己表現・自己決定”という六つの因子から構成されている。加えて、海外で生活する者の異文化に対応する能力である異文化間イフェクティブネス（intercultural effectiveness）を測る多文化性格質問紙（Multicultural Personality Questionnaire Scale）が開発されていて、5つの下位尺度から構成されている（Van der Zee & Van Oudenhoven, 2000）。それら5つの下位尺度は“虚心（Open-mindedness）”、“文化的共感（Cultural Empathy）”、“情動的安定（Emotional Stability）”、“柔軟性（Flexibility）”、“社会的率先（Social Initiative）”である。そして、多文化性格質問紙で測られる異文化間イフェクティブネスが高いほど、民族的偏見が弱く寛容であることが指摘されている（Nesdale, De Vries Robbé, & Van Oudenhoven, 2011）。さらに、異文化交流の動機付けの程度を測る異文化コミュニケーション動機尺度（Intercultural Communication Motivation Scale）が開発されており、“異文化コミュニケーションにおける心配（Intercultural Apprehension）”、“異文化コミュニケーションにおける落ち着き（Intercultural Poise）”、“異文化コミュニケーションにおける思慮（Intercultural Prudence）”、“異文化コミュニケーションにおける信頼（Intercultural Trust）”、“異文化コミュニケーションにおける自己効力感（Intercultural Self-efficacy）”という5つの下位尺度から構成されている（Kupka, Everett, Atkins, Mertesacker, Walters, Walters, Graf, Hill, Dodd, & Bolten, 2009）。この尺度は、海外で働く労働者の異文化コミュニケーションの動機付けを測るために開発されており、海外労働者養成トレーニングにおける評価を行う際に使用されることが期待されている。

以上で指摘したこれらの尺度は、国際社会で活躍する日本人の育成を重視した教育の効果を測る上で、確かに役に立つかもしれない。しかし、文化が国家という枠組みで規定されており、母国の文化・自文化、外国の文化・異文化という固定化された文化観が貫かれている。つまり、自らが属する国の人々は、皆同じものの考え方や生活習慣といった文化を持ち、他の国の人々の文化とは異なると捉えられていて、差異が強調され、かつステレオタイプ的に文化が捉えられているのである。さらに、社会の内における多文化共生の問題の理解が重視されているとは言えないことから、多文化共生に貢献する異文化理解の程度を測る尺度としては適切であるとは言えな

いのではない。

これに対して、沼田（2010）は、従来の異文化理解教育を受けてきたと考えられる日本人大学生の異文化理解の程度を捉えるために、人間一人ひとりの理解と社会的問題の理解を核とする大学生用の異文化理解尺度を作成した。その下位尺度は、“多様な価値観”、“少数派への無関心”、“保守的思想”、“ステレオタイプの理解”、“自己中心性”という五つの因子から構成されていて、先に挙げた尺度と異なり、人間の多様性の理解や日本社会の多文化共生の問題の理解を重視したものとなっている。ただ、多様な背景を有する人々が直面する社会的問題がどのように多文化共生を阻み、さらに自らとそういった問題がどのように関係しあっているのかという理解が多文化共生の実現に貢献すると考えられるが、沼田（2010）の尺度には、社会的に周辺化され、生き方の質が低められていると考えられる外国人以外の少数派や自分自身の社会的立場に関する項目が含まれておらず、多文化共生のための異文化理解尺度としては不十分な点が残っている。さらに、項目の表現が不自然なもの、分かりにくいものがある。また、大学生がいかに異文化を理解しているのかという大学生の異文化理解の現状が明らかにされていない。

従来の異文化理解教育は固定化された表面的な文化理解を目指しているため、そういった異文化理解教育を受けてきた日本人大学生は多文化共生の実現に貢献する異文化理解をしていないのではないかと考えられる。そこで本研究では、日本人大学生の異文化理解の現状を明らかにし、今後の異文化理解教育の方向性の示唆を得ることを目的とする。まず、沼田（2010）の尺度の不十分な点を克服する下位尺度の設定とその妥当性の確認を行う。妥当性確認のための尺度として、対人関係を円滑に運ぶために役立つ社会的スキルの尺度や自分自身や他者に対する肯定的概念に関する自他に対する信頼感の尺度を用いる。なぜなら、ステレオタイプの理解を抑え、人間の多様性の理解を進めるために、他者と向き合い自らの考えを積極的に伝えられる対人関係を築くことが重要であると考えられるからである。また、多文化共生に関する社会的問題の理解を深めるために、社会的不平等に苦しんでいる人々と向き合い自らがどのように社会において活動すべきか批判的に思考することが肝要である。したがって、他者を思いやり他者の置かれている立場を想像したりする共感性に関する尺度を妥当性の検討に用いる。

さらに、クラスター分析を用いた異文化理解の類型化や、妥当性検討で用いる尺度を使用した異文化理解の類型に関する検討を通して、異文化理解の類型の特徴や問題点を明らかにし、日本人大学生の異文化理解の現状を考察する。また、異文化理解の現状に関する性差を検討する。女性は男性と比べて社会的に高い立場についている人は少ないと考えられる。このような男女の社会的立場の違いは、女性の多様な生き方や、生き方の質にも影響を及ぼすことが考えられ、多文化共生の視点から男女

の社会的立場の違いを捉えていくことが肝要である。したがって、異文化理解・多文化共生の考え方や態度に関する性差を検討することで、その考え方や態度に対する男女の社会的立場の違いの影響を考察する。以上の議論を通して、今後の異文化理解教育の在り方を検討していく。

## 2. 方法

### 2.1 調査対象者

京都府内にある私立大学の日本人大学生 214 名（女性 130 名、男性 84 名）。

### 2.2 実験材料

#### ① 異文化理解尺度

沼田（2010）が行った日本人大学生の異文化理解に関する質問紙調査によって示された 37 項目のうち 8 項目（Appendix 1）を修正し、さらに 8 項目（Appendix 2）を加えた 45 項目に対して 6 段階評定法の形式で作成された質問紙。

#### ② 社会的スキル尺度

菊池（1988）による、社会的スキルを身に付けている程度を測定する尺度を使用した。18 項目から構成され、5 件法である。

#### ③ 信頼感尺度

天貝（1995）によって開発された、人に対する信頼感を多次元的に測定する尺度を使用した。“自分への信頼” 6 項目、“他人への信頼” 8 項目、“不信” 10 項目の合計 24 項目からなり、6 件法である。

#### ④ 多次元共感性尺度

鈴木・木野（2008）による、他者の心理状態に対する反応傾向を多次元的に測定する尺度を用いた。“被影響性” 5 項目、“他者指向的反応” 5 項目、“想像性” 5 項目、“視点取得” 5 項目、“自己指向的反応” 4 項目の合計 24 項目からなり、5 件法である。

#### ⑤ 共感経験尺度

角田（1994）によって開発された、過去の共感経験を測定する尺度を使用した。“共有経験” 10 項目、“共有不全経験” 10 項目の合計 20 項目からなり、7 件法である。

### 2.3 手続き

質問紙は、講義時間の中で、受講生に配布され、はじめに学籍番号と性別、年齢を記入することの説明が行われた。その後、それぞれの質問に回答することが求められる、講義時間内に回収された。回答に要した時間はおよそ 20 分であった。

## 3. 結果

### 3.1 因子抽出

まず、天井・床効果に関する予備的分析を行い、2 項目に天井効果が、さらに 5 項目に床効果が認められたので、これら 7 項目を削除した。そして、最尤法、プロマック

ス回転による探索的因子分析を行い、スクリープロットから 4 因子が適当とされた。したがって、4 因子と固定して再度最尤法、プロマックス回転による因子分析を行った。各因子に対する負荷量の絶対値が .350 未満の項目を削除して、再度因子分析を行った結果、以下に挙げる 4 因子解を採用した。第 1 因子（7 項目）は、‘多様な考え方を許容し、自由な発想を大事にする’や‘従来からある社会の考え方にとらわれず、新しい考え方を尊重する’といった項目から構成されるもので、“柔軟な価値観”と命名した。第 2 因子（5 項目）は、‘アイヌ民族の芸術文化や服飾文化に興味がある’や‘在日韓国・朝鮮人の歴史や現状を学びたい’といった項目からなるもので、“少数派への関心”と命名した。第 3 因子（9 項目）は、‘教師は偉そうに話すと思う’や‘他の人の関心事には、それほど興味をそそられない’といった項目からなり、“ステレオタイプの理解”と命名した。第 4 因子（2 項目）は、‘自分の意見がどのように受け止められているのか気になる’と‘自分が周りの人たちにどんな影響を与えているのか気になる’という項目からなるもので、“自己の社会的立場の認知”と命名した。

### 3.2 信頼性の検討と因子構造の確定

抽出された 4 因子の内的整合性をクロンバックの  $\alpha$  係数を用いて算出した。その結果、“柔軟な価値観”  $\alpha = .73$ 、“少数派への関心”  $\alpha = .78$ 、“ステレオタイプの理解”  $\alpha = .66$ 、“自己の社会的立場の認知”  $\alpha = .74$ 、となった。また、共分散構造分析による確認的因子分析をした結果、GFI = .84、RMSEA = .074 という値であった。4 因子構造モデルの適合度は概ね穏当なものであったので、“柔軟な価値観”（7 項目）、“少数派への関心”（5 項目）、“ステレオタイプの理解”（9 項目）、“自己の社会的立場の認知”（2 項目）という 4 側面から異文化理解を捉えることとした（Table 1）。

### 3.3 妥当性の検討

異文化理解尺度の妥当性を確認するために、“社会的スキル尺度”“信頼感尺度”“多次元共感性尺度”“共感経験尺度”の 4 尺度との相関係数を算出した結果を Table 2 に示す。

“柔軟な価値観”と“社会的スキル”（ $r = .394$ ）、“自分への信頼”（ $r = .478$ ）、“他人への信頼”（ $r = .348$ ）、“他者指向的反応”（ $r = .471$ ）、“視点取得”（ $r = .531$ ）、“共有経験”（ $r = .388$ ）との間にそれぞれ有意な正の相関関係が認められた。“少数派への関心”については、“他者指向的反応”（ $r = .239$ ）、“視点取得”（ $r = .283$ ）、“自己指向的反応”（ $r = -.235$ ）、“共有経験”（ $r = .204$ ）との間に有意な相関関係が認められた。“ステレオタイプの理解”と“他人への信頼”（ $r = -.286$ ）、“不信”（ $r = .344$ ）、“他者指向的反応”（ $r = -.360$ ）、“視点取得”（ $r = -.280$ ）、“自己指向的反応”（ $r = .364$ ）、“共有不全経験”（ $r = .214$ ）との間に有意な相関関係が認められた。そして“自己の社会的立場の認知”に関しては、“不信”（ $r = .211$ ）、“被影響性”（ $r = .238$ ）、“視点取得”（ $r = .211$ ）

Table 1：異文化理解尺度の因子分析結果

	F1	F2	F3	F4
〈第1因子〉 柔軟な価値観 $\alpha = .73$				
多様な考え方を許容し、自由な発想を大事にする	.735	-.118	.051	-.023
いろいろなもの見方からものごとを捉えようとする	.705	.049	-.088	-.121
自分にはさまざまな役割があると思う	.571	.133	-.127	-.038
従来からある社会の考え方にとらわれず、新しい考え方を尊重する	.567	-.200	.255	-.027
相手の立場になってものを考えるようにしている	.548	.139	-.125	.091
日本語が話せない外国人とも積極的に付き合おうと思う	.378	.118	.045	-.114
反対意見でも相手の意見を最後まで聞こうとする	.366	.026	-.076	.125
〈第2因子〉 少数派への関心 $\alpha = .78$				
アイヌ民族の芸術文化や服飾文化に興味がある	.036	.821	.170	-.199
アイヌ民族が受けてきた差別の歴史や現状に興味がない	.153	-.693	.124	-.047
在日韓国・朝鮮人の歴史や現状を学びたい	.051	.646	.048	.077
いわゆる障害のある人と積極的に付き合おうと思う	.063	.582	-.050	-.014
沖縄米軍基地問題に関して、沖縄の人々がどう考えているのか気になる	.053	.536	.090	.133
〈第3因子〉 ステレオタイプの理解 $\alpha = .66$				
教師は偉そうに話すと思う	.039	.136	.544	.003
中高年の人は頭が固いと思う	.093	-.039	.448	.147
いわゆる高齢者の人とあまり付き合いたいとは思わない	-.082	-.225	.434	-.068
他の人の関心事には、それほど興味をそそられない	-.078	-.087	.421	-.164
人にさしずめをするような人とは付き合いたいとは思わない	-.032	.246	.413	.026
日本で生活する外国人は、日本社会のルールに従うべきである	.104	-.117	.384	.094
他人のことを深く理解したいとは思わない	-.124	.059	.382	-.317
男性は女性と比べておおざっぱであると思う	-.062	-.054	.373	.097
深く考えなければならないような状況は避けようとする	-.237	.127	.370	.048
〈第4因子〉 自己の社会的立場の認知 $\alpha = .74$				
自分の意見がどのように受け止められているのか気になる	-.017	.013	.182	.794
自分が周りの人たちにどんな影響を与えているのか気になる	.162	.091	.207	.674
因子間相関	F2	.315		
	F3	-.108	-.299	
	F4	.317	.199	-.146

= .271)、“自己指向的反応” ( $r = .267$ )、“共有経験” ( $r = .249$ )、“共有不全経験” ( $r = .216$ ) との間に関連が認められた。

### 3.4 異文化理解の類型

異文化理解の違いによってどのような特徴が見られるのかを検討するために、異文化理解尺度の下位尺度を類型化し、異文化理解の違いと妥当性の検討で用いた4尺度との関連を検討した。まず、異文化理解尺度の下位尺度得点に基づいて調査対象者の分類を行うため、異文化理解尺度の各下位尺度得点を用いて、調査対象者をクラスター分析(平方ユークリッド距離、Ward法)により分類したところ、デンドログラムから四つに分類することが妥当であると判断された。

各クラスターの特徴は、以下の通りである。第1クラスターは、“柔軟な価値観” “少数派への関心” “自己の社

会的立場の認知”得点が高く、“ステレオタイプの理解”得点が低い群(以下、異文化理解理想型)。第2クラスターは、“柔軟な価値観” “自己の社会的立場の認知”得点が低く、“少数派への関心”得点が中程度で、“ステレオタイプの理解”得点が高い群(以下、異文化理解不全型)。第3クラスターは、“柔軟な価値観” “少数派への関心”得点が低く、“ステレオタイプの理解” “自己の社会的立場の認知”得点が高い群(以下、異文化理解抵抗型)。第4クラスターは、“柔軟な価値観” “少数派への関心”得点が中程度で、“ステレオタイプの理解”得点が低く、“自己の社会的立場の認知”得点が高い群(以下、一般型)。各群の異文化理解尺度下位尺度得点をTable 3に示す。

次に各クラスターの類型を独立変数、妥当性の検討で用いた4尺度の各下位尺度得点を従属変数とする分散分析を行い、その結果をTable 4に示す。その結果の一つを見てみると、“多次元共感性尺度・被影響性”で類型の主

Table 2 : 異文化理解尺度と先行研究の尺度との相関係数

	柔軟な価値観	少数派への関心	ステレオタイプの理解	自己の社会的立場の認知
社会的スキル尺度	.394**	.036	-.183	-.060
信頼感尺度				
自分への信頼	.478**	.011	-.041	-.053
他人への信頼	.348**	.170	-.286**	.105
不信	-.055	-.061	.344**	.211**
多次元共感性尺度				
被影響性	-.055	.005	-.112	.238**
他者指向的反応	.471**	.239**	-.360**	.167
想像性	.061	.117	.055	.185
視点取得	.531**	.283**	-.280**	.271**
自己指向的反応	-.114	-.235**	.364**	.267**
共感経験尺度				
共有経験	.388**	.204**	-.107	.249**
共有不全経験	-.118	.044	.214**	.216**

\*\*  $p < .01$  \*  $p < .05$ 

Table 3 : 各類型ごとの異文化理解尺度下位尺度得点の平均値および標準偏差

		柔軟な価値観	少数派への関心	ステレオタイプの理解	自己の社会的立場の認知
		M (SD)	M (SD)	M (SD)	M (SD)
A 異文化理解理想型	$n = 39$	5.02 (0.55)	5.16 (0.53)	3.29 (0.81)	5.44 (0.50)
B 異文化理解不全型	$n = 40$	4.39 (0.65)	3.71 (0.76)	3.41 (0.64)	2.99 (0.61)
C 異文化理解抵抗型	$n = 42$	4.25 (0.68)	2.51 (0.54)	3.51 (0.59)	4.90 (0.66)
D 一般型	$n = 93$	4.58 (0.60)	3.88 (0.47)	3.21 (0.59)	4.88 (0.67)

Table 4 : 各類型ごとの妥当性検討に用いた 4 尺度の下位尺度得点の差

	A $n = 37 \sim 39$ M (SD)	B $n = 39 \sim 40$ M (SD)	C $n = 41 \sim 42$ M (SD)	D $n = 87 \sim 93$ M (SD)	F 値	多重比較
社会的スキル尺度	56.77 (12.53)	58.83 (9.14)	55.83 (11.71)	58.51 (9.52)	0.86	
信頼感尺度						
自分への信頼	24.80 (5.42)	24.21 (4.36)	24.26 (4.78)	25.12 (4.74)	0.48	
他人への信頼	36.05 (6.69)	33.51 (5.57)	34.50 (5.37)	35.11 (5.42)	1.39	
不信	33.33 (7.71)	30.85 (7.31)	33.48 (8.67)	31.63 (7.43)	1.21	
多次元共感性尺度						
被影響性	18.19 (3.71)	15.13 (4.27)	17.67 (3.91)	17.17 (4.18)	4.22**	A > B; C > B; D > B
他者指向的反応	20.73 (2.84)	18.83 (2.89)	18.79 (3.78)	20.09 (3.07)	3.90**	A > B, C; D > B, C
想像性	19.05 (3.67)	16.98 (3.42)	18.31 (4.56)	17.62 (3.54)	2.25+	
視点取得	20.00 (3.27)	17.30 (2.83)	17.43 (3.31)	18.92 (2.76)	7.54**	A > B, C, D; D > B, C
自己指向的反応	15.05 (2.67)	13.78 (2.41)	16.00 (2.55)	14.53 (2.67)	5.40**	C > B, D; A > B
共感経験尺度						
共有経験	52.81 (9.42)	45.59 (8.07)	46.63 (9.03)	51.28 (7.60)	7.58**	A > B, C; D > B, C
共有不全経験	46.84 (9.80)	43.23 (8.17)	46.66 (9.57)	46.25 (9.13)	1.34	

\*\*  $p < .01$  \*  $p < .05$

効果が認められ ( $F(3, 206) = 4.22, p < .01$ )、Ryan's 法による多重比較の結果、異文化理解理想型と異文化理解抵抗型、一般型が異文化理解不全型より有意に高い得点を示した。

### 3.5 性差

抽出された4因子から捉える異文化理解と性差との関係を検討した。異文化理解尺度の4因子の男女の平均得点を算出し、因子ごとに  $t$  検定を実施した結果 (Table 5)、“少数派への関心”と“ステレオタイプの理解”という二つの因子において性別による違いが認められた (少数派への関心  $t(212) = 2.33, p < .05$ ; ステレオタイプの理解  $t(212) = 3.69, p < .01$ )。

## 4. 考察

本研究では、国際化が急速に進展する時代を生きる日本人大学生の異文化理解の現状を明らかにし、今後の異文化理解教育の示唆を得ることを目的とした。そして、日本人大学生の異文化理解の現状を検討するために、沼田 (2010) が作成した異文化理解尺度の問題点を克服した尺度の因子分析による抽出を試みた。その結果、様々な価値観を尊重する傾向を示す“柔軟な価値観”、少数派の人々への関心を示す“少数派への関心”、固定的に世界を捉える認知傾向としての“ステレオタイプの理解”、自らの社会的立場が他者にどのように受け止められているか、その認知傾向としての“自己の社会的立場の認知”という四つの因子が抽出された。外国人以外の少数派であり、社会的に周辺化されていると考えられる障害のある人に関する項目が“少数派への関心”因子の下位項目として加えられたこと、また、自らが他者にどのように捉えられているかという認知傾向を示す“自己の社会的立場の認知”が一つの因子として抽出されたことで、沼田 (2010) の問題点を克服することができたと考えられる。

### 4.1 下位尺度間の関連

4因子の因子間関連を見てみると、まず“柔軟な価値観”は、“少数派への関心” ( $r = .315$ ) と“自己の社会的立場の認知” ( $r = .317$ ) と正の相関が見られた。様々な考え方や視点を受容する態度は、少数派への意見にも目を向けさせ、関心を高めるといことが考えられる。また、自

らが他者にどのように受け止められているのかを考えるために、他者の声に耳を傾ける必要があるということが考えられる。

“少数派への関心”は、“ステレオタイプの理解” ( $r = -.299$ ) と負の相関が認められた。世界を多様な視点から捉えようとする中で、少数派に対する一元的理解が低減され、そういった人々に対する関心が向上するといことが言えよう。

### 4.2 下位尺度と既存の関連尺度との関連性に関する検討

異文化理解尺度下位尺度と妥当性検証のために使用した尺度との関連性を見てみると、まず“柔軟な価値観”と“社会的スキル”“自分への信頼”“他人への信頼”“他者指向的反応”“視点取得”“共有経験”との間には正の相関が認められた。他者との信頼関係を構築することで、多様な考え方を認めることができるようになって考えられ、ひとりよがりにならず、他者に対する気遣いも行えるようになると考えられることから、このような結果が出たことは妥当であるといえよう。

“少数派への関心”と“他者指向的反応”“視点取得”“共有経験”とは正の相関が、“自己指向的反応”とは負の相関が認められた。少数派である他者に関心を向けることは、少数派の人々の視点を取って、苦しみをできる限り自己に引きつけようとするということと関連があるといことが考えられる。

“ステレオタイプの理解”と“不信”“自己指向的反応”“共有不全経験”とは正の相関が、“他人への信頼”“他者指向的反応”“視点取得”とは負の相関が認められた。自分の視点からのみ世界を捉えるということは、他者を十分に配慮せず、他者との交流を重視しないということと関連があると考えられ、このような結果が出たことは妥当であるといえる。

“自己の社会的立場の認知”と“不信”“被影響性”“視点取得”“自己指向的反応”“共有経験”“共有不全経験”との間には正の相関が認められた。自分自身が他者にどのように影響しているのかを考えるためには、他者の視点から自分自身との関係を捉えるということが必要であるとされることから、他者指向的な項目と正の相関が見られることは妥当である。一方、自己指向的な項目との間にも正の相関が見られた。その理由としては、対

Table 5：男女の異文化理解尺度4要因の平均得点

	女性 $n = 130$ M (SD)	男性 $n = 84$ M (SD)	$t$ 値
柔軟な価値観	4.56 (0.67)	4.56 (0.66)	0.03
少数派への関心	3.94 (0.99)	3.62 (0.96)	2.33*
ステレオタイプの理解	3.19 (0.59)	3.52 (0.70)	3.69**
自己の社会的立場の認知	4.63 (1.01)	4.64 (1.01)	0.07

\*\*  $p < .01$  \*  $p < .05$

人感受性が高まるということは、それだけ人の欠点も見えやすくなると考えられ、それゆえに他者に対して否定的な捉え方もしてしまうからだということが考えられる。

#### 4.3 異文化理解の類型に関する検討

クラスター分析によって異文化理解の4類型が示されたが、その各クラスターの類型を独立変数、妥当性の検討で用いた4尺度の各下位尺度得点を従属変数とする分散分析を行った結果から何が考えられるであろうか。まず、異文化理解理想型において“他者指向的反応”“視点取得”“共有経験”といった下位尺度得点が、異文化理解不全型や異文化理解抵抗型のそれらの下位尺度得点よりも高いという結果となった。異文化理解理想型は様々な背景を持つ他者と交流し、多様な視点からものごとを捉えようとしていることが伺える。こういった姿勢は多文化共生の実現に向けて肝要であると考えられ、多文化共生のための異文化理解が進んでいるということが考えられる。その一方で、“自己指向的反応”得点が異文化理解不全型よりも高いという結果も示された。異文化理解理想型は対人感受性が高いため、人の欠点に気付きやすく、他者を否定的に捉えやすくなることが考えられるため、このような結果が見られたと言える。しかし、葛藤しながらも、様々な人々と向き合おうとしていることが伺え、こういった人間の複雑性を示す学生に対しては、他者のポジティブな側面を考えさせ、他者との交流を促進させるような教育的働きかけが必要であると考えられる。

異文化理解不全型と異文化理解抵抗型に目を向けると、“被影響性”“自己指向的反応”下位尺度得点が異文化理解不全型より異文化理解抵抗型の方が高い結果となった。異文化理解抵抗型は、他者から影響されやすい一方で、人の欠点も容易に見えてしまうことから、他者に対する関心を示そうとしないということが考えられる。異文化理解不全型は“自己指向的反応”得点がより低いとはいえ、他者に対する関心を十分に示していないということから、多文化共生の実現に十分に関心を示していないということが考えられる。異文化理解教育の実践において、こういった異文化理解を十分にしていない学生に対しては、他者への関心を高めたり、他者の視点から社会の在り方を考えさせることを目的とする教育的働きかけが必要である。さらに、異文化理解抵抗型の学生はこのような教育的働きかけに対して抵抗を見せることが考えられるので、異文化を理解することに対する抵抗をできるだけ抑えるような、教育的働きかけをするときの表現方法を明らかにすることも重要であると考えられる。

一般型は、“他者指向的反応”“視点取得”“共有経験”といった下位尺度得点が、異文化理解理想型に次いで高いという結果となった。ただ、“視点取得”得点に関しては異文化理解理想型との間に差がある傾向が認められた。したがって、異文化を持つ他者の視点取得を促す課題を積極的に課していくことで、一般型の学生は異文化理解理想型の学生へと移行していくことが期待される。そのためにも、異文化を持つ他者の視点取得を効果的に促す

課題の開発が肝要である。

#### 4.4 下位尺度の性差に関する検討

下位尺度の平均値に関して男女で性差が見られるかどうかt検定を行ったところ、“少数派への関心”と“ステレオタイプの理解”で有意差が認められた。女性が少数派に対する関心がより高く、男性はより固定的なものごとを捉えるということが示唆された。鈴木(2006)が男性の役割は女性の役割よりも社会的に高い価値があると認められているため、男性の方が保守的であるということ指摘していることから、女性と比べて男性は男女間の社会的不平等をもたらす既存の社会の在り方を変えていくことに対して男性という社会的立場から一元的に意味付けを行い、社会変化の不必要性を示す傾向があるということが伺えよう。そして男性と比べて女性と同じような社会的立場に置かれている少数派の意見により耳を傾けるということが考えられる。したがって、男性にとって女性や社会的少数派の視点を取得させて社会の在り方を考えさせるような課題を課することが異文化理解の実践において重要であるということが伺える。一方、第4因子“自己の社会的立場の認知”因子の平均得点は男女間で有意差は見られず、共に中央値よりも高い結果となったが、男女間の社会的不平等を問題化するためには、自らの社会的立場を批判的に捉え直す機会を男女共に提供することが重要だと考えられる。

#### 5. 大学における異文化理解教育の在り方への示唆

本研究の結果から、日本人大学生の異文化理解の現状として、異文化理解を積極的に行おうとする者や、十分に異文化理解ができていない者、また異文化理解をすることにに対して抵抗を見せる者など、一枚岩ではない現状が明らかになった。さらに、男女によって少数派への理解やステレオタイプのものの捉え方に違いが見られることが明らかになった。したがって、日本人大学生の異文化理解の現状はきわめて複雑であるため、異文化理解の教育方法もあわせて多様なやり方で実施する必要があると考えられる。特に大学においては、学生が自由に科目を選ぶことが出来るため、必ずしも異文化理解に関する科目を多くの学生が選択するとは言えない。それゆえ、異文化理解に関する科目を限定的に開講するだけでなく、様々な科目で異文化理解に関する内容を取り入れていく必要がある。また、異文化理解は多文化共生の実現に向けて行われるべきものと考えられるので、異文化理解の理論を講義の中で紹介するだけでなく、実際学生が生活する社会を多文化共生の視点から批判的に捉えさせていくために、多文化共生の問題と積極的な関わりを持たせるような課題を課することも肝要であろう。大学における異文化理解教育は、多文化共生に関する様々なトピックを、多様な方法を用いて行う必要があると言えよう。

#### 6. 今後の課題

本研究は日本人大学生の異文化理解の現状を明らかに

することを目的としていたため、日本人大学生のみを調査対象としていた。しかしながら、異文化理解教育は初等・中等教育の現場でも行われているため、小学生や中学生、高校生に対しても同様に異文化理解の現状を明らかにする調査を行うことで、日本の異文化理解教育の効果をより詳細に明らかにすることが必要である。こういった総括的に異文化理解の現状を明らかにすることで、日本の異文化理解の現状をより批判的に捉え直すことができ、今後の異文化理解教育の方向性や教育方法に関する包括的な示唆が明らかにされることが期待される。加えて、小学生や中学生、高校生に対して異文化理解の現状を明らかにする調査を行うにあたって、それぞれの学年にふさわしい質問項目を用いる必要があり、文言や内容を改めていく必要がある。したがって、それぞれの学年にふさわしい尺度をさらに作成していくことが肝要であると言える。

### 引用文献

- Allport, G. W. (1954). *The Nature of Prejudice*. Cambridge, Massachusetts: Addison-Wesley.
- 天貝由美子 (1995). 高校生の自我同一性に及ぼす信頼感の影響. *教育心理学研究*, 43(4), 364-371.
- 岩田紀 (1989). コスモポリタニズム尺度に関する経験的検討 *社会心理学研究*. 4(1), 54-63.
- 角田豊 (1994). 共感経験尺度改訂版 (EESR) の作成と共感性の類型化の試み. *教育心理学研究*, 42(2), 193-200.
- 假屋園昭彦・城戸内幸枝・阪本佳代・二宮弓子・岩脇祐希・窪田克彦 (2009). 高校生を対象とした国際理解教育における評価基準の開発的研究—鹿児島純心女子高校版国際理解授業評価基準尺度の作成—. *鹿児島大学教育学部研究紀要 教育科学編*, 60, 123-138.
- 菊池章夫 (1988). *思いやりを科学する - 向社会的行動の心理とスキル -*. 川島書店.
- Kupka, B., Everett, A. M., Atkins, S. G., Mertesacker, M., Walters, L., Walters, T., Graf, A., Hill, B., Dodd, C., & Bolten, J. (2009). The intercultural communication motivation scale: An instrument to assess motivational training needs of candidates for international assignments. *Human Resource Management*, 48, 717-744.
- 馬淵仁 (2002). “異文化理解”のディスコース—文化本質主義の落とし穴—. 京都大学学術出版会.
- 宮島喬 (1999). *文化と不平等*. 有斐閣.
- Nesdale, D., De Vries Robbé, & Van Oudenhoven, J. P. (2011). Intercultural effectiveness, authoritarianism, and ethnic prejudice. *Journal of applied social psychology*, 1-19.
- 沼田潤 (2009a). 日本の教育政策における異文化理解教育の位置付け—問題点と今後の方向性に関する一考察—. *評論・社会科学*, 88, 193-225.
- 沼田潤 (2009b). 日本の初等・中等教育における異文化理解教育の実践状況に関する調査研究. *異文化間教育学会第30回大会発表抄録*, 92-93.
- 沼田潤 (2010). 日本人大学生の異文化理解に関する質問紙調査—異文化理解の意識に関わる諸要因の基礎研究—. *評論・社会科学*, 91, 169-186.
- 鈴木淳子 (2006). 発達とジェンダー. 鈴木淳子・柏木恵子編, *ジェンダーの心理学—心と行動への新しい視座*—. 培風館, 35-67.
- 鈴木有美・木野和代 (2008). 多次元共感性尺度 (MES) の作成—自己指向・他者指向の分別に焦点を当てて—. *教育心理学研究*, 56(4), 487-497.
- Van der Zee, K. I., & Van Oudenhoven, J. P. (2000). The multicultural personality questionnaire: A multidimensional instrument of multicultural effectiveness. *European Journal of Personality*, 14, 291-309.
- 山岸みどり・井上理・渡辺文夫 (1992). “異文化間能力”測定の試み. *現代のエスプリ*, 299, 201-214.

(受稿：2012年8月10日 受理：2012年9月28日)

## Appendix 1 : 修正された 8 項目

- 
1. 「新しい人たちとの結びつきを求める」  
→ 「親しい人たちとの関係を大切にしたいと思う」
  2. 「日本では、日本語が話せない外国人は意見を伝えられなくても仕方がないと思う」  
→ 「日本語が話せない外国人とも積極的に付き合おうと思う」
  3. 「大学教員は頭が固いと思う」  
→ 「大学教員はえらそうに話すと思う」
  4. 「男性が家庭で料理や育児をすることは当然だと思う」  
→ 「男性が家庭で料理や育児をするべきだと思う」
  5. 「従来からある社会の考え方にとらわれず、新しい考え方に挑戦する」  
→ 「従来からある社会の考え方にとらわれず、新しい考え方を重視する」
  6. 「教師は権威的な人ばかりではないと思う」  
→ 「権威的な人と付き合いたいとは思わない」
  7. 「日本語が話せない外国人とはコミュニケーションをとりたくない」  
→ 「日本語が話せない外国人とは仲良くなりたくない」
  8. 「新しい考え方を学ぶことにあまり興味がない」  
→ 「自分とは異なる考えを持つ人は苦手である」
- 

## Appendix 2 : 新しく加えられた 8 項目

- 
- ・自分自身の社会的立場に関する項目
    1. 自分が周りの人たちにとってどんな立場にあるのかはあまり気にしない
    2. 自分は周りの人たちより優れていると感じることがよくある
    3. さまざまな人に支えられていると思う
    4. 自分が周りの人たちにどんな影響を与えているのか気になる
    5. 自分にはさまざまな役割があると思う
    6. 自分の意見がどのように受け止められているのか気になる
  - ・少数派に関する項目
    1. いわゆる高齢者の人とあまり付き合いたいとは思わない
    2. いわゆる障害のある人と積極的に付き合おうと思う
-